

## インド民族運動とS・C・ボース

— 一九三〇年代の政治的一考察 —

福田 幸子

## はじめに

本稿では、S・C・ボース<sup>(1)</sup>という一個人を、インド民族解放運動の中で、特に一九三〇年代に限って、考察してみたい。

ボースについては、多くの概説書、並びに、参考文献によってまた、ボース自身の自叙伝『闘える印度<sup>(2)</sup>』によって、その言動を窺い知ることができる。しかし、その多くは、ボース自身の研究というより、ボースをガンディー(Gandhi)に対立させ、ガンディーに対する批判者の一人としてのみ取り扱っているように思う。したがって、その限りでは、ガンディーに対する批判者とはなりえても、ボース自身がいかなる政治的理念なり、立場なりで行動したのであるかについては、曖昧で、かなりの問題が残されているといえよう。私はここで、ボースに焦点をあて、ボースという一個人が、国内的にも、国際的にも、一九三〇年代という歴史的諸条件に規定されつつ、積極的な意義においていかに行動し

えたか、また、歴史的必然の流れの中で、その行動がどこに限界をもつものであったか、すなわち、かれの政治的実践における意義と限度について考察してみたい。<sup>(3)</sup>

## 一、一九三八、九年と前衛ブロック結成

## A、一九三八、九年とボース

インド国民会議派(Indian National Congress)内における、一九三〇年代全般にわたっての、ボースの動静の詳細について述べることは、紙幅の関係上、ここでは捨象したい。ここでは一九三八、九年のみをとり上げて述べるにとどめようと思う。そのことの理由の一つは、ボースの民族主義者としての活動のクライマックスが、この一九三八、九年にあったとみなしてよいと考えるからであり、他の一つは、第二次世界大戦の勃発という国際的條件のもとで、ボースの会議派議長再選をめぐって、内訌をはらみながら、会議派が主としてインド民族運動を指導してきたこと、それとの関連におけるボースの政治的葛藤の解明に役立つであろうと考えるからである。

一九三八年二月、ボースは、インド国民会議派ハリブラ(Haripura)大会の議長に就任する。彼はガンディーの指名によって立候補したものであった。<sup>(4)</sup>ボースは、この第五十一回大会の始まる前、その政治的抱負を次のように述べている。

会議派議長としての私の職務上の任務は……連邦制に献身的

に抵抗することです。それは、非暴力や、もし必要とすれば、非協力をも含んだ、平和的で、合法的な力で闘われるでしょう。<sup>(6)</sup>

この言葉からでもわかるように、ボースは闘争方法において、「平和的で、合法的な力で闘う」というガンディーの方式を、従来のボースとは異なっていて、表面上ではあっても是認していた。一九三七〇八年における会議派の政治的方針の特徴は、対外的には「英国の戦争に、インドは一切参与しない」という方針をますます固めていることであり、対内的には反連邦制という方針の強化のために、藩王国と接近する態度を積極的に示し始めたということの中にみられるであろう。

一九三九年ボースは従来の慣例を破って、再度議長に立候補し再選された。このとき、ボースと対立して、ガンディーの指名によって立候補したシッタラマイヤ (B. P. Sitaranayya) も、彼の大著の中でこの時の経緯を述べているが、ボース自身の語るところによれば、一九三九年三月のトリプリー (Tripuri) 大会は、ボースの議長再選をめぐって、混乱が醸成されつつあった。既にボースが立候補したとき、十五名の運用委員会 (Working Committee) のうち十二名は、ボースに立候補を再考し、シッタラマイヤを満場一致で当選させるよう勧告していた。ボースの再選後これら十二名の運用委員は辞任し、「異常な前兆」は「最高潮に」達した。<sup>(9)</sup> そのみならず、G・V・パント (G. Vallabh Pant) をはじめとする約一六〇名の全印会議派委員会のメンバーによって、

「ガンディーのみが独りよく会議派を導きうるものであって、運用委員の指名はガンディーの意志による<sup>(10)</sup>」という趣旨の声明が発表されたりもした。

こうした諸事情のもとにあっても、ボースは自己の立場の正当性を次のように述べている。

インドが英国に対して真に統一的な闘争を貫徹させようとするなら、われわれは現在、恰も左右両翼に自身を分裂させるような方向をとるべきではない。既に反連邦制の闘争でさえ会議派右派はそれを展開する意志はなく、立憲的方向に向いつつあるではないか。私の立候補は、個人的な理由に基づくものではなく、真の独立を獲得するためのものである。私は例えば A・N・デヴァ (Acharya Narendra Dev) のような真の反連邦主義者が立候補するなら、退くであろう。<sup>(11)</sup>

この言明からもわかるように、ボースは真の独立闘争にとって、また民族解放運動という性格からも、無意味な自己分裂が避けられねばならない点を、正しく認識していたと思われる。このように混乱した状態の中に、ボースは絶対安静を必要とする病気に陥り、やむをえずガンディーとの書簡の往復によって事態の收拾をはかるとした。<sup>(12)</sup> この書簡にみるボースの基本的な態度は、彼の考える運用委員会は真に統一的な左右両翼を含んだ (composite) ものでなければならぬということであった。これに対してガンディーは、運用委員会は考え方において一致する (homogeneous) メンバーで構成されねばならないとする態度をとった。このよう

に、運用委員会の性格をめぐって両者は対立しつつ、幾度も書簡の往復がなされた。これらの書簡の中で、ボースは自己の基本的態度を主張しながら、あくまで会議派の統一と協調のために努力している。そのことは常に一貫して、ガンディーのサツティアグラハ(非暴力)を弾劾してきたボースが次のように述べていることからわかるであろう。

われわれが今日もっている制裁は、大衆運動、すなわちサツティアグラハ(Satyagraha)である。そうして全印的なサツティアグラハの大衆闘争に対して、今の英国政府は、長くこれにたち向いうる状態にないのである。<sup>(13)</sup>

さらにボースは、最初の、議長による運用委員指名の規定を犯すパント決議に対する批判さえ取消し、ガンディーによる運用委員の指名と、不服従運動の開始を要求するに至っている。しかし、これに対するガンディーの回答は、運用委員会の性質は先に述べたガンディーの考え方と変らぬものであり、なおその指名は、ボース自身が行なうべきであることを繰返し述べているだけであった。ここに至つてボースは、現実的にも十二名の運用委員の辞任によって、彼自身議長辞任のやむなきにおいこまれた。このようにして、一九三九年四月二九日、ボースは辞任の声明を述べるとともに議長の席を退いたのである。

## B、前衛ブロック

一九三九年五月初旬、議長辞任の直後、ボースは会議派内に前

衛ブロック(Forward Bloc)を結成した。この必然性について、ボースは次の四点を指摘している。<sup>(14)</sup>

- (1) 会議派右派は、将来、左派と協調しないことを公言し、混成内閣(Composite Cabinet)の提案を拒否した。
- (2) ガンディーをはじめとする右派は、近い将来の民族運動を度外視していることを公言している。
- (3) 左翼ブロック(Left Bloc)の名のもとにおける会議派内の反帝国主義者及び急進主義者の結合は、社会主義者や共産主義者によって断念されている。左翼統合という試みは、したがってわれわれによってのみ可能となる。
- (4) ガンディーをはじめとした右派は、既にガンディー・セヴァ・サンガ(Gandhi, Seva, Sangha)の援助のもとに結集しており、われわれのこれ以上の躊躇は、右派による左翼分子の潰滅を意味するであろう。

以上の四点からも明白なように、ボースがその議長辞任まで主張していた右派との協調という論点は、表面的にも完全に姿を消し、逆に、右派との対立という論点がむしろ強調されている。爾後ボースは、「前衛ブロック」の中に自らの政治的立場をかためつつ、「左翼統合の試み」を実現して行こうとした。「前衛ブロック」によつての「左翼統合」は、ボースの想像以上に困難なものであつたらしく、その初期を除けば、ほとんど成功していない。<sup>(15)</sup>結局前衛ブロックは、会議派社会党(Congress Socialist Party)、国民戦線グループ(the National Front Group)、急進連盟(the

Radical League) それに前衛ブロックの四者から成り、それぞれ相対的な独自性をもちながら、しかも統一を保つという、「左翼統合委員会」(Left Consolidation Committee)<sup>(17)</sup>のなかの一派としてしか、自己を貫徹しえなかった。しかもこの統一は、はやくも一九四〇年六月、ボースが「既にこの統一は崩れている」と述べているように、きわめて短期間のものではなかったようである。

ボースが計画した「左翼統合」運動の実体は、およそ以上のようなものでしかなかったにせよ、ボースが「前衛ブロック」にかけた期待はどのようなものであったのだろうか。

一九三九年六月二三日、ボンベイでの第一回前衛ブロック全印会議で、前衛ブロックの組織とそのプログラムが採択された。そのプログラムは、<sup>(19)</sup>①左翼統合、②会議派内での真の有効な統一の達成、③会議派の名における民族闘争の回復、であった。さらにこれを別のところでは、<sup>(20)</sup>①会議派内閣は、實際上、州会議派委員会、並びに全印会議派委員会に從属すべきこと、②会議派と労働者階級、農民、その他諸組織との直接的で緊密な結束の確立、③常置の義勇軍の設立、④反連邦制の民族闘争の強化、として具体的に列挙している。このうちの後者における①は、一九三九年六月、会議派内閣を州委員会から独立させるというボンベイ大会決議に反対するものである。さらに、ここにみる③については、前衛ブロックの性格、および、ボースの政治上の理念を具体的に表わすものとしても、かなりの意義をもつものである。「義勇軍」

というボースの構想は、既に一九三一年ころから考えられ始めていた。<sup>(21)</sup>そうして一九三八年ハリプラ大会の演説の中においては、ボースはインドにおける義勇軍の必要性を説くとともに、「ナチの労働奉仕団のような団体は入念に研究するに値するものであり、適当な修正を加えれば、インドに利益をもたらすかもしれない」と述べている。<sup>(22)</sup>ここに述べられているようなナチズムへの接近については、民族運動の指導者としてのボースを考察する上に一つの大きな手がかりとなるものであり、後の「ボースの政治的理念」の中でこれを考察したい。

さてボースが前衛ブロック結成当時から強調していたことは、「会議派を見捨てる為ではなく、会議派を改造することが、われわれの任務である」<sup>(23)</sup>ということであった。したがって、この限りでは第一回大会のプログラムにある「会議派内での、真の有効な統一の達成」は当然だった。しかし第二次大戦勃発後の、一二月六日付『前衛ブロック』<sup>(24)</sup>で、ボースは次のように述べている。

しかし、〔第一回大会でのプログラムについて〕僅かな変更が必要になってきた。……われわれは……会議派内で多数を獲得し、会議派の名のもとに前進的な運動を起すまで待てなくなっている。<sup>(25)</sup>……

このように、「会議派内での統一」、「会議派の名の下での民族的闘争の回復」という、第一回大会でのプログラムを大きく変更して、いわば実質的に会議派から分離して、その独自の動きを始めたとみてよいだろう。この動きはボースが「危機に瀕しても、

政治的なハムレット達のために行動が停滞しているとき、この動き〔前衛によるダイナミックな政策〕は、行詰りを打開し、熱心な大衆を渦に巻き込み、それによって、それまでの追隨者から右派を孤立させることが可能なのである<sup>(26)</sup>と述べていることからわかるように、かなり急進的な、実際の行動をその特徴としてしめしていたと言えるであろう。したがって一九四〇年六月、ナグプル(Nagpur)第二回大会の決議の基本線は、三九年一二月六日付の『前衛ブロック』の主旨に示されていた。すなわち、①「全権力をインド国民へ(All Power to the Indian)」のスローガンの下に、闘争を強化し、その範囲の拡大を図る。②仮国民政府を通じて、インド国民への全権のすみやかな移譲をイギリス政府に要求する。③同時に、民族的統一のために、特にヒンドゥー・スリム統一のために尽す。④この過渡期に国内的統一と連帯を保つ、という見地のもとに、無党派的な立場で市民防衛軍(Citizens' Defence Corps)を組織する、ことが決議されていた<sup>(27)</sup>。

ボースは三九年一月四日付の『前衛ブロック』で、「……戦争がヨーロッパにおいて勃発し、インドはそれにひきずられていった。全世界はこの危機に対して準備を進めていた。しかしインド国民会議派はそうではなかった。かくも無能な指導者は、世界のほとんどどこにも見出すことができない<sup>(28)</sup>」と述べ、四〇年六月、「……だからわれわれは、帝国の援助や、インドの援助をもって、英国を救済しようなどと論議するのはやめようではないか。インドは、この重大な危機に、インド自身について先ず考え

ねばならない<sup>(29)</sup>」と述べている。これらのボースの言葉からみて、第二次大戦を迎えた情勢のもとにおける、インド民族運動を發展的に推進させるという観点からかれを評価しようとすれば、われわれは、かれがかなり卓越した見解をもっていたものと評価するであろう。ただし、運動の方法については、ナチズムへの無批判な接近という誤まった論点があつて、ネルーをしてさえ、前衛ブロックを評して、「ドイツのナチ党の勃興を想起<sup>(30)</sup>」させるものであり、「大衆の支持を……利用しようとしていた<sup>(31)</sup>」と云わしめているのである。こうした、前衛ブロックは一九四〇年七月二日のボースの逮捕後、さしたる発展をみぬまま瓦解していった<sup>(32)</sup>。最後に、前衛ブロックの組織構成について簡単に触れておきたい。前衛ブロックの組織構成は、会議派のそれとほぼ同じものとみてよく、毎年一度、前衛ブロック全印会議(All India Conference of the Forward Bloc)を開催し、各州にその州組織委員会(Provincial Organising Committee of the Forward Bloc)をもち、前衛ブロック全印運用委員会(All-India Working Committee of the Forward Bloc)がその最高執行機関であつたと思われる。そして前衛ブロックのメンバーたる資格は会議派のメンバーたる資格がなければならなかった<sup>(32)</sup>。

## 二、ボースの政治的理念

### A、「左翼勢力」との関係

本節では、労働運動、農民運動、会議派社会党、並びにインド共産党を、ボースがいかに認識していたかを考察してみたい。

ボースは、一九二〇年に創設された「全印労働組合会議」(All-India Trade Union Congress)に所属していた。<sup>(33)</sup>この労働組合会議は、世界恐慌を背景とする一九二八・九年度の労働運動昂揚期に、穏健派が脱退して結成した「労働組合連盟」(Indian Trade Union Federation)と、三一年、極左主義者が脱退して結成した「全印赤色労働組合会議」(All-India Red Trade Union Congress)という、新たな二組織の結成によって、三つの組織に分裂鼎立した。<sup>(34)</sup>ボースはこれらの分裂過程の中で、依然として労働組合会議に留まつていた。かれは労働組合会議を次のように評している。

労働組合会議は、労働組合連盟と、赤色労働組合の中間に位置し、換言すれば、それは明白に社会主義的であるが、第三インターナショナルの政策や戦術には反対するものである。しかしまた、チューリッヒの第二インターナショナルにも、アムステルダム国際労働組合連盟にも所属するものでもない。英国労働組合会議には信をおかず、インドの政治においては自由連盟よりもインド国民会議派と多くの共通点をもつ。<sup>(35)</sup>すなわち、かれにおいては、労働組合会議は労資の階級関係の揚棄による労働者の解放を目指すというような性格をもつものではなく、むしろ会議派と政策的に密接な関係を保つという程度の性格のものであった。<sup>(36)</sup>民族主義者としてのボースは、こうした労働運動が、本来、大きく民族解放運動と結びついて巨大な政治的

な力に転化しうるものであると考え、また労働運動をそのような方向に発展させることこそが、まさにインド労働運動における焦眉の急務であると考えていたとみて間違いないであろう。他方農民運動<sup>(37)</sup>について、ボースがこれを指導したという事実については明確でないが、一九三四年に「労働団体の方が農民団体より進んでいる」と述べているように、一応ボースは労働団体の方により進歩性を認めている。しかしこのことのみをもって、ボースが農民運動に無関心であったとすることはあたらないであろう。

次にボースは、一九三四年五月に設立されたインド会議派社会党といかなる関連をもち、これをどのように把握していたであろうか。ボースは、会議派社会党について次のように述べている。

私は会議派社会党のメンバーではない。しかし私は、その創設から一般的原則や政策には賛同している。第一に諸左翼的分子が一つの党に結合されるということは望ましいからであり、第二に、左翼ブロックは、ひとえにその性質が社会主義的であるなら、存在理由 (raison d'être) をもちうるからである。<sup>(38)</sup>

すなわちボースは基本的には会議派社会党の存在を正当化し、これを是認しているかのようにみえる。しかし、ボースの会議派社会党に対する真意は、むしろ次の言葉の中にみるべきではないだろうか。

現在の形態における社会主義政党内、多くの前進は望まれない。党の構成は雑多であり、党の観念は時代遅れである。

この左派の叛逆から、最後に明確な観念、綱領、行動計画をもった新しい完全な党が出現することと思われる<sup>(39)</sup>。

この言葉は、ボースが会議派社会党に積極的な意義付けをしていないことを明らかにするものである。のちにかれが前衛プロックを結成し、これを完全な政党に発展させようとした事実を考え併せるならば、このことはなおさら明白であろう。他方、そのようなボースに対する会議派社会党の態度はいかなるものであったか。それは、一九三九年のボースの議長再選の際の態度にも表わされているように、会議派社会党は、ボースの積極的な支持者ではなかった。「ボースの敗北の鍵が会議派社会党の背信にあった<sup>(40)</sup>」という見方は、おそらく有力なものであろう。

最後にボースとインド共産党との関係について考えてみたい。一九三四年、ボースはソヴィエトの共産主義に対する理解を次のような形で述べている。

現在、共産主義がインドで多大の影響力をもたないのは、インドの運動が民族主義者による民族的自由のための運動であるにも拘らず、今日の共産主義がいかなる形態においても民族運動に同情を抱いていないからである。ロシアは現今守勢にあり、世界革命運動に興味を抱かず、最近のロシアの資本主義諸国との協定は、<sup>(41)</sup>革命的勢力としてのロシアの地位を著しく傷つけている。さらにロシアは、国内産業の再編成、及び日本の脅威に対する準備に心を奪われ、また列強との友好関係に熱心になっているため、インドの如き国家には積極的

な興味を示さないのである。<sup>(42)</sup>

すなわちロシア共産党に対するボースの最大の不満は、ロシア共産党が民族運動に対して、ボースが期待するような態度や理論をうち出さず、「インドの如き国家には積極的な興味を示さない」ということに向けられた。他方スターリンは、一九二八年のコミンテルン第六回大会後の一九三〇年、インドを次のように評価している。

インドのような植民地の現状の基本的な新しい様相は、民族ブルジョアジーが革命党と日和見党とを分裂させているばかりではなく、主としてこのブルジョアジーの日和見党は、概して帝国主義との協調を回復すべく、既にやっきとなっている。<sup>(43)</sup>

したがって、ネルーやボース、その他の左翼指導者も英国帝国主義者の枠内に大衆闘争を閉じ込めているからして、「最も有害」で「危険な障害物」として、むしろ逆に非難されていたのである。<sup>(44)</sup> コミンテルンというよりはむしろ、ロシア共産党の方針に沿ったインド共産党は、必然的に「妥協的ブルジョアジー」のなう民族運動の軌道から、少くとも一九三五年までは、大きくはずれていった。こうした共産党の方針に対して、ボースは「共産主義者を変質させるものは、もう一つの社会改造のみである。」<sup>(45)</sup>と反撥し、一つのテーゼをボースなりに引き出すとともに、これを具体化させようとしたのである。

さて一九三五年のコミンテルン第七回大会は、一変して、ファ

シズムに対する「統一戦線」を決議した。これより先、既に一九三四年七月には、インド共産党はその「左翼セクト」政策を捨て、新路線を採用するようとの指令を受けていた。<sup>(46)</sup>かくしてインド共産党は、会議派をさながら突然に革命的役割をもつにいたったものであるかのように評価しなおし、共産党員は「カダール組織を着けて、忠実な国会議員となり、アヒムサを説教し、チャルカのカンデー主義的農村向上運動を宣伝しさえするようになる」<sup>(47)</sup>。こうして、ネルーやボース等の指導者は、インド共産党によって帝国主義の「追隨者」から「同志」に変貌させられていった。<sup>(48)</sup>このような民族運動に対するインド共産党の政治的諸決定における転換は、コミンテルンに対してのインド共産党の理解の相対的な欠如と、他方、インド民族運動に対してなされるコミンテルンの理解の相対的欠如とに、換言すれば、コミンテルンもインドもともに決定的には、確乎たる民族運動の理論を確立しえなかったことの中にその原因を見いださるのではないかと思う。こうした混乱はインドの民族運動史を顧るとき、大きな損失であったと思う。

ここで最後にもう一度もとに戻って、ボースの、会議派社会党なり、共産党なりの理解を通して、かれの思想性を考えてみよう。さきにもみたように、ボースは会議派社会党を、「別の完全な党の出現」が必要であるとして、これに不信を抱き、共産党については「他のもう一つの社会改造理論が必要」であるとして、ボース独自の理論を展開しようとしている。したがって、この限りでは、ボースは理論的(歴史的・論理的)に確乎たるイデオロ

ギーを実践の中にうちたてようとする態度よりはむしろ、「社会主義理論や共産主義的イデオロギーによって圧迫感を感じよう、なことはなかった」<sup>(49)</sup>という指摘もあるように、より現実的な諸問題に対する政策的解決の実践的累積を通して自己のイデオロギーをつくりあげ、ついにみずからの階級的立場をつきつめて考える厳しさに徹しえなかったとも受け取れるのである。

#### B、「共産主義とファシズムの総合」<sup>(50)</sup>について

『闘える印度』の中でボースは、一九三三年一月一八日付の新聞に発表されたネルーの見解を引用して、これに反論を加えている。この反論の中で「共産主義とファシズムの総合」が提起されている。先ずネルーは、その新聞の中で次のように述べている。

現在の世界は、共産主義の何らかの形態と、ファシズムの何らかの形態の二者択一を迫られており、私はファシズムを嫌悪し、全面的に共産主義を選ぶものである。ファシズムと共産主義との間には何ら中間的な途はない。私は共産主義の理想への到達の手段・方法については、正統共産主義者の為したことのすべてに賛同するものではない。それは各国の状況に応じて処さるべきであると考え。しかし私は、共産主義の基本的な思想、及びその科学的な歴史解釈は健全である<sup>(51)</sup>と思う。

一九三〇年代の世界的な激動は、恐慌によって生み出され、政治



的には、ファシズムの抬頭を目のあたりにみ、ブルジョア民主主義をファシズムによって擬似社会主義的なものと変質させて行こうとする力と、そのようなファシズムの直接の脅威からみずからの共産主義の成果を死守しようとする力と、さらにファシズムを否定しつつ、ブルジョア民主主義を徹底的に擁護しようとする力と、この三つの力の対抗関係の中から生まれていた。このような当時の世界的な規模での対立と拮抗の状況を歴史的に顧るときここで述べられているネルーの見解は、民族運動の指導者としては極めて素朴な表現ではあるが、確かに比較的冷静な発言であると思う。ただしネルーが、当時のかれの見方をその後のインド民族運動の中にいかに生かしていったかは別の問題である。それはともかく、これに対してボースは次のように反論している。

ネルーは根本的に誤っている。われわれの選択が、唯二つに極限されると断言する理由はどこにもない。ヘーゲルを信じようと、ベルグソンを信じようと、あるいは他のいかなる進化の理論を信じようと、創造がすでに終りにきていると考える必要は決してない。諸般を考えるに、世界史の次の様相は共産主義とファシズムの総合(棒線引用者)を創出することであると考えたい。この全世界にとって重要である実験が、インドでなされたとしても驚くにあたらない。もう一つの実験(マハトマ・ガンディーのそれ)がインドで起り、それが全世界に重大な関心をよび起しているのを、われわれはみているではないか。<sup>(53)</sup>

ここにみる「共産主義とファシズムの総合」という具体的な問題の検討を始める前に、一般的にボースは歴史の発展をいかに把握していたかに触れておきたい。かれは次のように述べている。

『テーゼ』と『アンチ・テーゼ』との間の争いの中から『総合』が生まれる。この『総合』は、進化の次の形態の『テーゼ』となり、この『テーゼ』が『アンチ・テーゼ』を創出し、両者間の争いはその『総合』によって解決されるのである。このように発展の歯車は動き続けるのである。<sup>(53)</sup>

ここにみるように、「発展の歯車」は「テーゼ」と「アンチ・テーゼ」との「総合」によって、より高次に発展してゆくものであるとしている。私はこの点について、ボースの歴史的な流れの把握の仕方、ひいては、インド民族運動の政治的な展開のさせ方の中に、最大の特徴をみるような気がする。

さてボースは、「共産主義とファシズムの総合」の根拠をいかなる内容において把握していたのだろうか。ボースは、「この両者はアンチ・テーゼであるにも拘らず、総合をなすための根本的な共通点が存在する」として五項目を挙げている。<sup>(54)</sup>すなわち、①両者とも個人に対する国家の優越を重んずる。②両者とも党規約を重んずる。③両者とも議会的民主主義的デモクラシーを排除している。④両者とも党の独裁を重んじ、意見を異にする少数党を冷酷に弾圧する。⑤両者とも国家の計画的工業の再編成を重んずる、としている。事実、これらの諸事項を個別的・形式的にみれば一応共産主義にも、ファシズムにも、その特性のいくつかと

して正しいと言わざるをえないだろう。しかし、ここで問題となることの第一は、明らかにボースが、共産主義とファシズムとを原則的(一般的)・内容的な次元からこれを把握しているのではなく、両者の「共通点」を挙げて、これを皮相的に、且つ形骸化してその「総合」を正当化している点であり、第二には、インド民族解放運動を考える上に、ナチの「訓練された団体」が、ボースをひきつけてゆかざるをえなかった、インド民族運動上での諸事情についてであり、最後に歴史の流れに対するボース独自の把握の仕方についてである。こうしたボースの理論上の混乱が、しばしば実践主義者が陥りがちな、すなわち目標のためには手段を選ばぬような無原則な妥協を生み出していったものと考えざるをえない。ボースは前衛ブロックを発展させることにも成功せず、末期にいたっては、他国のしかもファシズムの援助を借りてインドの独立を達成しようと考え始めるにいたった。そうしてかれがその援助をドイツに求めたのはけだし当然のことであつた。一九四一年における、かれの「今次戦争ではファシズムが勝利を占めるであろう。……しかし、ファシズム枢軸は、勝利してもインドに不利になることはしないだろう」というような言葉は、ファシズムに対するかれの把握の誤りと樂觀を如実に示すものであり、ひいては、帝国主義一般に対する理解も当然曖昧にならざるをえなかったことをしめしている。ボースがインド民族運動を主観的には真剣に考えたにも拘わらず、真にその民族運動の指導者としての力を発揮しえなかったのは、客観的にはこうしたかれの理論

的曖昧さの中に、自己を埋没させていったという点に、その原因が見出されうらと思う。

### おわりに

私はここで、一九三八、九年の会議派の内訌を語り、ボースの政治的理論の究明を主として論じてきた。はじめに問題としたように、ガンディーとボースを互いに対立するものとして把える問題の立て方にあつては、当時から既に世界的に顕著であつたイデオロギー上での対立を直接的・無媒介的に、かれら両者の上に反映させてしまうということになりがちであるように思われた。しかし、両者の相違は、体系的なイデオロギー上の相違として深い根をもったものではなく、両者の、いわば理念に基づくそれぞれの理念を具体化する際の運動の方法上での相違、すなわち、ガンディーの方法が、アヒムサ(Ahimsā)、サティアグラハ(Satyagraha)ブラフマチャリア(Brahmacharya)であつた、とすれば、ボースのそれは、サミャヴァダ(Samyavada)であつた、まさにそのような相違であつた。そうして、こうした方法上の相違に加えて、さらに対立感情があつたとすれば、M・ブレッシャー氏の指摘にもみるように、ボースのベンガル人としての氣質が、ガンディーやネルーと比較しても、民族主義者としては決してかれらにひけはとらないという自尊心を起させていたということも、その原因のひとつに加えられるかもしれない。

最後に、私はここでボースの政治的理念を、かれの「綜合」の理論において述べてきた。そうして、かれ独自の理論にかれ自身が埋没していったことにその悲劇性をみた。かれがこの点で歴史的必然ともいふべき流れを正しく見極めることなく、思想的な混沌に陥っていったことは、たしかに残念でならない。しかし誰しも、インド民族解放運動におけるかれの存在を否定し去ることはできないであろう。

## 註

- (1) Subhas Chandra Bose (一八九七～一九四五)。一八九七年一月二十三日、オリッサ (Orissa) に生まれ、一九一四年までこの地に過し、後カルカッタ大学、ケンブリッジ大学に学ぶ。一九二〇年、インド文官 (Indian Civil Service) 試験に合格。かれが民族運動を開始するのは一九二一年。二十年代のかれはC・R・ダス (Das) に傾倒し、スワラジ党で活躍。一九二八年には、J・ネルーらと共にインド独立連盟を結成。一九三三～六年、病氣療養のためヨーロッパで過す。一九三八、三九年、会議派議長。一九四一年一月インドを脱出。四三年二月、日本に向う。一九四三年七月、インド国民軍総裁。日本のインパール作戦にも協力。一九四五年八月十九日、台湾で飛行機事故のため急逝。
- (2) *The Indian Struggle 1920—34*, London 1935. 綜合インド

研究室訳、昭一七。

- (3) C・S・サムラ (Samra) が、現在カルフォルニア大学で、“Modern Indian Project”の下で、ボースの生涯に亘る伝記的研究に従事しているということである。
- (4) ガンディーの指名による立候補は、必ず選出されるという慣例があった。したがって、ガンディーの指名によらない翌年のボースの再選はこの点でも興味深い。
- (5) 英領インド (British India) と藩王国 (Native States) とから成る、インド統一連邦国家を設立しようとするもの。ここには明らかに、藩王国という封建勢力を利用しようとした英国の「分割統治」の意図がみえる。
- (6) *The History of the Congress*, Vol. II. p. 73.
- (7) *Ibid.*, p. 105.
- (8) S・ Patel (S. Patel)・M・アザド (M. Azad)・R・プラサド (R. Prasad) らを先頭とする。
- (9) 「ネルーは公式には辞任していないが、それを暗示させる声明を出している」とボースは述べている。 *Important Speeches and Writings of Subhas Bose*, edited by Jagat S. Bright, M. A., 1947, p. 258.
- (10) *The History of the Congress*, vol. II. p. 110.
- (11) さらにボースは、自分の立候補は自分の知らない間に、自分の同意をうることなく、いくつかの州から、候補者として公式に発表されたものであると述べている。 *Important Speeches &*

- Writings*, pp. 245-46.
- (12) *Ibid.*, pp. 274-311.
- (13) *Ibid.* p. 259.
- (14) *Crossroads, The Works of Subhas Bose, 1938-40*. Compiled by Netaji Research Bureau, Calcutta, 1962, pp. 310-11.
- (15) *Ibid.*, pp. 176, 180.
- (16) 最初は、農民社会主義指導者や、共産党員の M・N・ロイ (Roy) などの支持もあった (*The Unity of India*, by J. Nehru, London, 1948, Appendix C) が、結局失敗している。ボースはその理由を「一つには相互不信 (mutual distrust) と、一つには諸原因 (factors) による」としている。
- (17) ボースの議長辞任後の六月末の、ボンベイでの全印会議派委員会 (R・ブラサド議長) 決議に反対して、この「左翼統合委員会」は、七月九日、「全インド日 (All India Day)」の闘争を開始した。これを直接の原因として、ボースは運用委員会によってベンガル州会議派議長の資格を剝奪されるとともに、爾後三年間、会議派のいかなる委員にも選出される資格なしとの決議をうける。
- (18) *Crossroads*, p. 311.
- (19) *Ibid.*, p. 211.
- (20) *The Unity of India*, Appendix C.
- (21) *Important Speeches & Writings*, p. 98.
- (22) *Ibid.*, p. 199.
- (23) *Crossroads*, p. 187.
- (24) ボースを編集主任とした週刊紙。
- (25) *Ibid.*, p. 227.
- (26) *Ibid.*,
- (27) *Ibid.*, pp. 324-25.
- (28) *Ibid.*, p. 212.
- (29) *Ibid.*,
- (30) Nehru, *An Autobiography*, London, 1936, p. 606.
- (31) ボースの十カ所以上に及ぶインド旅行記をみれば、前衛プロックは、特に、ベンガル、パンジャブ、西北国境で支持を受けていたことがわかる。これらの諸州では、会議派がその内閣成立に成功していない地方として興味深い。
- (32) 各々の委員会の役割、及び人員数については明確でない。なお、主なメンバーに、サラット、チャンドラ・ボース、トリパティ、サルカール、ナリマン、ホスマーニー、チャクラバルティ、S・S・シングなどがいた。
- (33) ボースが組織的に労働運動に参加を始めたのは、一九二八年とみてよいだろう。 (*The Indian Struggle*, p. 177.)
- (34) その後間もなく労働戦線の統一化が起り、三一年、反共派労働組は、「全国労働組合連盟」に合体。三三年、労働組合会議と赤色組合とは再合同。三五年には、労働組合会議と全国労働組合連盟も共同行動をとることを申合せ、三八年、単一の中央機関を設置することを決定。

- (35) *The Indian Struggle*, p. 42.
- (36) 例えば、一九三一年の労働組合会議での決議は、デリー協定不信任であった。(The Indian Struggle, pp. 236-37.)
- (37) 農民運動は、既に散発的であったが、一九二〇年代から、連合州、ベンガル、パンジャブ等の地で活潑だった。のち一九三六年、全印的な組織として、「全インド・キサーン・サバー」(All Indian Kisan Sabha)が結成される。
- (38) *Important Speeches & Writings*, p. 201.
- (39) *The Indian Struggle*, p. 344.
- (40) *Nehru, A Political Biography*, by M. Brecher, London, 1959, p. 250.
- (41) 一九三二年、フランスとの不可侵条約締結や、三四年ロシアの国際連盟加入等を指すと思われる。
- (42) *The Indian Struggle*, pp. 347-48.
- (43) *A History of the Praja Socialist Party 1934-59*, by Singh, p. 58
- (44) *Ibid.*, pp. 59-60.
- (45) *The Indian Struggle*, p. 348.
- (46) *India and Anglo-Soviet Relations 1917-47*, by C. S. Samra, Bombay, 1959, p. 135.
- (47) K・ティラク著『国際共産主義運動史——コミンテルンの発展と没落——』社会経済研究会訳、昭36、一五六頁。
- (48) *India and Anglo-Soviet Relations*, p. 135.
- (49) *A Short History of the Indian National Congress*, by K. V. Ramana Rao, Delhi, 1959, p. 185.
- (50) ボースは、これを「サン્યાサ」(Samyavada)と訳し、直訳すれば、「総合または均等の教義」の意であるとしている。
- (51) *The Indian Struggle*, p. 345.
- (52) *Ibid.*, p. 346.
- (53) *Crossroads*, p. 174.
- (54) *The Indian Struggle*, p. 346.
- (55) *The Springing Tiger, A Study of Subhas Chandra Bose*, by H. Toye, London, 1959, p. 55.
- (56) *Nehru, A Political Biography*, p. 246.